

帰国報告

カリフォルニアの風に吹かれて ～ 補習授業校での日々～

前サンフランシスコ日本語補習校

現石狩市立花川中学校 教諭 安栄 智裕

1. はじめに

私は、平成16年度から3年間、サンフランシスコ日本語補習校に派遣されていました。

皆さんは補習校という学校についてご存じでしょうか。この報告書をお読みいただく方の中には在外教育施設派遣を希望していらっしゃる方もおいでかと思えます。海外へ行く＝日本人学校 ではありませんのでご注意ください。

在外教育施設には大きく分けて日本人学校と補習校、そして私立の教育機関があります。厳密にいうと日本人学校も補習校も私立学校ですが、文部科学省が私たちのような公立学校教員を派遣している点から見ると公立学校の要素が含まれていると言えます。日本人学校については私にとっても未知の部分が多いので、本報告書の完成を楽しみにしています。

では、補習校とはどのような学校かサンフランシスコを例に簡単に説明します。(各補習校によって事情が違いますので、文の冒頭には必ず「あくまでもサンフランシスコの場合」という一文をつけてお読み下さい)

補習校に通う生徒達は月曜日から金曜日までは現地の学校へ通っています。もちろん全教科英語で学習しています。そして、土曜日に日本の勉強をするために補習校へ登校してきます。

1日6時間、年間47日間で日本の教科書を修了するというハードな学校です。ここで気を付けて頂きたいことは、日本語補習校は「日本語を勉強する学校ではなく、日本の教科書を使い、日本語で勉強する学校」だということです。

在外教育施設派遣を希望している多くの教員は日本人学校を希望していると思います。私が派遣された年度は、約450人が全世界へと飛



金門橋からSFの町を望む

び立ちました。その殆どが日本人学校への派遣です。では、補習校へは何人が派遣されたかということ、約5%、20数名の派遣です。そのうちの半数以上は管理職ですから、私のような教諭はほんの数名でした。また、19年度から補習校へはシニア派遣制度が始まりました。(注：詳細は各自でお調べ下さい)ですから、今後というか今でもそうですが、現職教員が在外教育施設に派遣されると言うことは日本人学校への派遣が基本となると思います。

そのようなことから、私の報告は皆さんのお役に立たないかもしれませんが。

選ばれし者が、それともはずれだったのかは本人にもわかりませんが3年間の派遣報告をさせていただきます。



フリーウェイの風景

2. サンフランシスコ及びベイエリア

1847年、スペイン領「ヤーバ・ブエナ」がサンフランシスコと改名され、1848年にカリフォルニアがアメリカ合衆国領となりました。同年、現在の州都であるサクラメントで金鉱が発見され、ゴールドラッシュが始まりました。それまで数百人であったサンフランシスコの人口が一気に4万人にまで膨れ上がりました。その後、1869年には、アメリカ大陸の東西を結ぶ大陸横断鉄道が7年の歳月を経て完成しました。

日本との関係では、1860年に勝海舟らに乗せた咸臨丸が太平洋を渡りサンフランシスコに到着しています。ゴールドゲートブリッジを見渡せる場所に記念の石碑が立っています。

また、戦後、日本が主権を回復するための平和条約を結んだ地もサンフランシスコです

2001年には「サンフランシスコ平和条約」締結50周年記念が行われました。昨年度は市内にある日系コミュニティの中心地「ジャパントウン」で入植100周年記念事業が多数開催されました。



左：Japan Townの風景

右：入植100周年を記念して設置されたモニュメント

今日、サンフランシスコ及びベイエリアには、経済や文化の面でも世界をリードしている企業（コンピューター関係）や大学（UCバークレー校、UCSF校、スタンフォード大学等）が多くあります。また、多くの東洋人がサンフランシスコやベイエリアに住んでおり、アメリカ

の中でも特色ある地域となっています。特にサンフランシスコでは、中国系の人口割合が市民の約半数を占めており、公用語は英語ですが、街中では中国語をよく耳にします。また、近年中南米からの人口流入が多くスペイン語を話す人々が多くなっています。他にも、国際都市にふさわしく各国の領事館が多数あり、世界中の様々な言語を耳にすることができます。日本語も例外ではなく、各企業の駐在員や多くの日本人観光客を見かけますし、私が子どもと公園で遊んでいると白人、アジア人（日本人は除く）を問わず、日本語で話しかけられることもしばしばありました。彼らの多くはビジネスで日本との付き合いがあったり、またはビジネスチャンスを狙って日本語を学んでいたりしていたようです。

サンフランシスコの気候風土について紹介します。

サンフランシスコは、ワシントンDC、アテネ、仙台、新潟とほぼ同じ緯度にあり、アメリカ西海岸にある地中海性気候帯の北端に位置しています。気候は典型的な夏乾冬雨で、1年中気温の差がありません。雨期といっても降水量は東京の3分の1程度であり、12月後半から2月に大部分の降雨があります。私が赴任した時は、4月初旬から11月半ばまで降雨はゼロでした。

上述のように気温も年間を通して最高気温が20前後なので北海道出身の私達にとっては湿度も低くとても快適でした。鹿児島出身の同僚の口癖は「さむい、さむい」でしたが・・・

雨は少ないのですが、5月から9月にかけては毎日が霧の季節となります。サンフランシスコは半島の突端にある10キロ四方の小さな丘の町ですが、霧がこの小さな尾根を越えられないのか、夏は太平洋側では毎日霧に覆われ太陽が見えないこともままあります。マーク・トゥエインは「私が体験したもっとも寒い冬はサンフランシスコの夏だ」と言っているほどです。

ナイター観戦では夏でもブランケットやトレーナーは手放せません。ところが、ダウンタウンや半島の内海側、またはサンフランシスコから車を15分も走らせるとそこはカリフォルニアの暑い夏が待っています。住むならそちらの方がいいのかもしれませんが代々の派遣が借りている家は霧の多いサンセット地区にあるので霧の中での3年間を過ごして参りました。

決してそこが嫌なわけではなく、私達家族にとっては暑いより寒い方が過ごしやすかったですし、ダウンタウンまで車で15分というとても便利なところでもありました。

サンフランシスコの人口は、80万人程で特に大きな町ではありませんが、ベイエリア一帯の中心都市としての機能があります。ベイエリアはサンフランシスコを中心におよそ半径100kmの地域を指しますが、それら全体では700万人の人口を有しています。特に大きな都市としてはシリコンバレーの中心地サンノゼ市(約100万人)が含まれています。

3. 現地の教育事情

カリフォルニア州では義務教育年齢が6才から18才となっており、小学校5年、中学3年、高校4年となっています。高校への入学は日本の中2、3年生に相当する年齢の生徒が対象となっています。年度は9月始まりで6月に修了します。学区は市内で一つのため、教育局から指定された学校へ通学することになります。そのため、家の目の前に学校があったとしても、場合によっては保護者が車で送り迎えしなければならない地区にある学校へ通学することもよくあります。小学校卒業までは保護者の送迎が義務づけられています。もちろん登下校だけでなく、外出も保護者同伴しか認められていませんし、子どもだけで留守番をさせた場合も警察に通報されることがあります。日本のように小学生だけで公園や広場で遊ぶという光景は見られません。

小中高への入学に関しては7校まで希望を出

すことができます。そのため、長子の保護者は学校見学や説明会には積極的に参加しています。(兄弟が在学していると弟妹は優先的に入学できます)

高校まで義務教育のため公立校の場合、授業料負担などはありませんが、私立高校との格差は大きく、ある程度経済的に余裕がある家庭は私立学校を選択しているようです。

格差の一つにカリキュラムの問題があげられます。アメリカでは財政の状況で最初に削られる予算は教育費です。そのため、公立学校の多くは、音楽の先生を雇えないので音楽の授業をしないとか体育を行わないなど、日本では考えられないことがあちこちで見られます。

他にも、施設面や行事で保護者への寄付やボランティアを募り、何とかやりくりしている学校が多いと聞いています。

さて、そんな中、毎年かなりの数の小中高校生が保護者の転勤などにより、日本からベイエリアへとやってきています。日本人学校はありませんので、全員が現地校へと通うわけですが、当然、殆どの子は英語が話せるわけではありません。学校や塾で習っていたとしても実際の発音やスラングなどにとまどう子が多く、大変な苦勞をしています。もちろん学校によっては、ESL(English as a second language)学級を設置し対応してくれるところもありますが、前述のように学校の割り当ては教育局による指定のため最初から他の生徒と同じ授業を受けることになる生徒も出てきます。

特に高校は、学校での成績がそのまま大学進学へと結びついているため、毎日夜中まで膨大な量の宿題をこなさなければならず、日本の高校生よりは学習量は間違いなく多いようでした。

4. サンフランシスコ補習校と派遣教員

ここではサンフランシスコ日本語補習校についてもう少し詳しく説明をしたいと思います。また、補習校での派遣教員の業務についても述

べていきたいと思ひます。

サンフランシスコ日本語補習校は1968年に児童生徒数101名、教員数5名でスタートしました。その後の日本の経済成長と共に学校規模も大きくなり、現在では児童生徒数1200名余り教職員数100名の大規模補習校でロスアンゼルスに次ぐ世界第2位の補習校となっています。ベイエリア一帯から登校してきますので校区を2つ(サンフランシスコ地区とサンノゼ地区)に分けてそれぞれに小学部、中高部を設置しています。

開設教科は、

小1・2年生	国語、算数、活動	4時間
小3～6年生	国算社、理	6時間
中1～3年生	国数社、理	6時間
高1・2年生	国選択(数・社)	6時間

となっています。(注:19年度より小3以上は5時間に削減となっています)

年間授業日数は47日間ですが現地校が夏休みに入る6月第3週から2週間、連続10日間の集中学習を行います。小中学生はこの集中学習を終えたあと、日本の学校へ体験入学する子ども多数います。是非、皆様の学校での受け入れをお願いします。

残りの37日間を4月から3月までの土曜日に授業を行っています。学校ですので当然入学・卒業式はもちろん運動会や文化祭などの行事も行っています。それらを差し引くと実質の授業時数は国、数80コマ、社・理35コマ程度で教科書1冊を終えることとなります。

1200名余りの児童生徒達ですが、約7割は米国生まれ、または永住権を持っている子ども達です。企業駐在員の若年化・長期化の影響から帰国を前提としている子ども達の滞在年数も5～10年と長く、学校生活は米国でしか経験がないという子どもも多数います。

当然の結果ですが、日本語よりも英語の方が得意という子ども多く、補習校の最重要のルールは「英語を使わない」というものです。

入学の条件は授業についていける日本語力を

持っていることとなっていますが、語彙力や漢字力では日本国内の子ども達より低位と言わざるを得ません。ですが、昨年度実施したNRTの結果(小2・5、中2で実施)算数・数学では3学年とも全国平均を数ポイント上回る結果となりました。これは、日本式の系統だった算数・数学の学習内容と現地校での数学教育の相乗効果と考えています。国語においても上述の語彙力や漢字力では差がついてしまっていますが、読解力や表現力などには優れている子どもが多く、トータルでは全国平均を数ポイント下回る程度でした。現地校での厳しい環境にもまれながら、尚かつ土曜日も補習校で学び続けている子ども達は非常に能力的に優れていることの証明だと思ひます。

中学生、高校生と話をすると日本人としてのアイデンティティや誇りを非常に強く感じますし、日本への愛着心の強さにも感心させられます。「自分は米国生まれだけれども、将来は日本の大学に行きたいし、将来的には生活もしてみたい」「日本の食べ物はおいしい、歌や文化も好き」「日本製品はどれも便利で優秀」など、我々にとっては当たり前と思ひていることが彼らの日本への思いの重要な要素となっていることを実感できます。

彼らは真のバイリンガル・トライリンガルとなる可能性を十分に持っています。これからの国際社会で日本の地位を保ち向上させるためにも彼らの力が必要だと思ひます。彼らは日本の宝だとこの3年間で思いを強くしました。

反面、毎年何人もの子どもが、現地校との両立の難しさや、日本の学習への疑問(なぜ、アメリカで暮らしているのに日本の勉強をしなければならないのか)アイデンティティでの苦悩など、さまざまな理由から退学の道を選ぶ子や保護者もいます。退学後数年してから、後悔しているとの声を聞くと残念でなりません。

先ほど、英語を使わないと言う最重要ルールについて触れましたが、実は、もう一つ補習校には決して破ることのできない重大な校則があ

ります。それは、「学校のものにさわらない」というものです。「？」と思われる方もいると思いますが、週1日の学校では自前の校舎など持っていません。現地校を年間契約で借用しています。(ちなみにウン千万の借料です)現地校は生徒が授業ごとに教室を移動しますので、各教室にはその先生の個性があふれています。壁だけでなく天井にも様々な掲示物が貼ってあったりぶら下がっていたり、教室で鳥を飼っていたり、OHPやPCなどが教室の中央に位置していたりと、子どもにとっては興味をそそる物がたくさんあります。ですが、それをさわって壊したり、無くなってしまったりした時には大変です。過去には校舎を借りることができなくなり、移転を余儀なくされたこともありました。実際には補習校の子ども達が壊したのか怪しい物も沢山ありますが、まずは、補習校に苦情がきますし、こちらも弱い立場なので強気になれないことも多々あります。少しでもこちらの言い分を伝えるために、日頃から「うちの子ども達は現地校のものには決してさわらないよう指導をしているし、子どもも実行している」と現地校に言い続けるしかありません。

また、現在、借りることができている校舎はすべてミドルスクールです。中高生は問題ないのですが、小1, 2年生は机や椅子が大きすぎて、足がぶらんぶらんと揺れてしまい決して良い学習環境ではありません。日本と同じ教科書を使い、数倍のスピードで進む授業を、1日6時間座学で学ぶのはとても大変なのだということをご理解いただければと思います。

それでは、補習校での派遣教員の職務について説明します。大規模補習校へ派遣される教員は基幹教員として以下の職務を行う事とされています。

- ア 教育課程の編成及び進行管理に関すること
- イ 学校行事の実施計画策定及び実施に関すること
- ウ 児童生徒の転出入に伴う学籍の管理に関すること

- エ 進路指導及び教育相談に関すること
- オ 現地採用教員に対する指導・助言及び研修の実施に関すること
- カ 教材教具の整備計画の策定等に関すること
- キ 教材教具の開発に関すること

上記7項目が派遣教員の職務になります。私のような教諭でも、授業は行いません。3年間で行った授業は、現採教員への模範授業や派遣教員がいない小規模な補習校での出前授業です。

では、仕事は何をしていたのかというと、時には教務であったり、時には教頭であったり、時には指導主事のような仕事をイメージしていただければ間違いのないと思います。その中で、どの割合が多いかと言うと圧倒的に、現場管理職としての「教頭役」でした。国内で管理職研修など何もうけないまま現地に着いたとたん、「教頭先生」と呼ばれた時には責任の重さに戸惑うばかりでした。派遣教員にはそれぞれの担当校があり、私はおもにサンフランシスコの中高部を担当しました。着任後すぐに入学式があり、当日、初めて先生方との顔合わせです。現地の事情もよくわからない私がいきなり責任者ですので多くの方にご迷惑をおかけしたと思います。そんな中、他の先生方との橋渡し役や教職員のまとめ役もして下さったのが教務主任の先生でした。巡り合わせとしか思えませんが、この方とは同郷でもあり、公私に渡ってお世話になりました。この夏帰国された彼と一献交わしました。数年に一度しか日本には戻られないのですがこれからもお付き合いをさせていただきたいと思っています。

よく「補習校ってどんな学校？」との質問を受けます。こちらも面倒くさくなると、「土曜日に日本の勉強をしている学校です」と答えてしまいます。そうすると、必ず帰ってくるリアクションが「週1日の学校っていいな、自分も行きたい」というものです。これは安易に答えてしまう私が悪いのですが、世の中、外国まで行って週1回しか働かなくてもいい仕事などある

わけありません。1週間の動きについて簡単に説明します。

まずはもっとも大事な土曜日。補習校に通う子ども達が集まる大切な授業日です。この日はどんなに体調が悪くとも絶対に休むなと校長から強く指導を受けます。私が仕えた2人の校長先生はどちらも強烈な個性の方でしたが、帰国後の今もお付き合いをさせていただいています。

7:30出勤、事務所から運んだ教材などを運び込み、現地校の教室を職員室と作りかえます。夕方、元の状態に復元しなければならないので、机の配置などメモや写真を撮ります。(サンフランシスコ校には自宅から10分ほどでつきますが、サンノゼ校に行く場合は片道、1時間ほどかかるので6時過ぎには家を出ます)

8:30職員打ち合わせ後、朝礼を行います。3年間、毎週生徒達の前で話をしたことはよい思い出となっています。授業開始後は、校舎の状況確認やセキュリティ・事務員との打ち合わせ、先生方とのミーティングなどを行います。

時には、他の団体が体育館などを使用する場合もあり、関係者や現地校の用務員さんとの打ち合わせなどもあります。もちろん英語でのやり取りです。と言いたいところですが、その場合には事務員が通訳してくれるので何の心配もありません。

1日のうち、1ないし2つの授業を参観します。その後時間がとれれば、先生との話などをします。時間がない時は、先生方が授業終了後記入する経営日誌にコメントを書きます。この授業参観がかなり心的負担になります。と言うのも、現地採用の先生方は基本的に1年契約です。当然毎日の授業実践や生徒指導力で評価され次年度の契約、または昇給と言うこととなります。その判断の材料となる資料が、毎週私たちが校長へ報告するレポートとなります。もちろん一生懸命やって下さる先生が殆どですが、先生方の中には、教壇に初めて立たれる方もいて、現場に戻った今の私同様、悩みながら指導にあたっている方もいらっしゃいます。先生方

に適切なアドバイスをしてあげることができるかが私の3年間の課題でした。過去には、契約について訴訟問題にまで発展した事もあり、管理職の大変さを経験しました。

昼休みには、生徒の安全確認のためグラウンドや校舎内外を巡回しています。巡回当番の先生もいますが、州法で労働者の昼休みの確保が厳しく義務づけられているため、どうしても手薄になり管理職が対応するしかありません。

午後の授業が始まったあと昼食をとります。午後からも授業参観や時には保護者・生徒との教育相談なども行います。どうしても座学での6時間であり、しかも日本より速いスピードで進む授業では生徒も疲れてしまいましたが、先生も生徒もカリフォルニアのカジュアルな服装の中に、スーツにネクタイの私や校長が教室に入っていくと子ども達は緊張して授業を受けます。その様子が可愛らしく、内心微笑んでいました。

午後4時に生徒が下校しますので、迎えが来るまで、生徒達とおしゃべりをしながら保護者を待ち、全員の下校を見送ります。その後、月2回ほどの割合で職員会議や研修を行い7時頃先生方全員の退勤を確認してから用務員さんへ施錠をお願いし(ここは英語です)帰宅します。その後、校長へ1日の内容を電話報告します。

長い土曜日がこれで無事終わると良いのですが、たまに、この後、先生方からの相談電話がかかることもありました。「派遣は24時間勤務だ」とよく言われていたのを思い出します。

日・月の2日間休み、火曜日に派遣の自宅を周りながら荷物を回収し、事務所へと向かいます。午前中は正式な報告書の作成や金曜の夕方からたまっているメールへの返信、先生方の経営日誌へのコメント書きなどを行います。午後からは校長、事務局長、教頭4名と校務担当事務局員によるミーティングを行います。土曜日の報告や校長からの指導・指示、事務局長からの連絡や今後の予定など多岐に渡っての話し合いをします。その後金曜日までに、それぞれの担当校で必要な業務を行います。先生方から頼

まれた教材の用意や入学希望の生徒・保護者との面接、日本の関係機関や他の補習校との連絡。必要に応じて現地校まで出向き借用の打ち合わせ。そして、模範授業の準備や研修資料・職会資料の作成などの業務に追われます。特に授業の展開案や研修資料作りなどはやる気になればきりがないので夜遅くまで事務所に残ることも間々あります。全員が残っていると後半は酒盛りになることもありました。派遣や事務局の皆さんとの絆を深めるためには大切なことでもありました。因みにサンフランシスコは公共交通機関が発達しているので我々も平日の勤務は電車通勤です。24時間動いているので安心して飲めます。

補習校の目的の一つに日本の学校文化を学ぶというものがあります。下の写真は文化祭で学級全員による合唱・器楽伴奏を行っているものです。練習時間も少ないなか、子どもたちは毎年精一杯の発表をしています。少しでも時間を生み出すために先生方と知恵を絞りながら、年間の教育課程を編成するのも大切な仕事でした。

5. 転機を迎えている補習校

派遣3年目に大きな転機を迎えました。それは日本の財政事情も大きく影響しているのですが、派遣教員数の削減でした。

5名の派遣教員が勤務するためには原則1600人以上の児童生徒数が必要となります。これまでは前述の4校体制を考慮しての5名派遣でしたが平成18年度から4名体制、19年度には3名になるとの決定がなされました。

派遣数が3名になれば今までのような管理業務は不可能です。そこで校長の意向を受け理事会が下した決定は、現地採用の管理職を雇用するというものです。各校に主幹を配置し、今まで派遣が担当していた管理業務を引き継ぐ事としました。主幹は常勤ですので、事務所内の業務移行も進めていきました。4名の主幹は各校の教務主任経験者の先生にお願いしました。SF中高部の主幹としては前述の先生が就任さ

れました。当然それまでメインとしていた仕事をお持ちです。年収面でも減額になるにもかかわらず「補習校の仕事が好きだし、子どものためになるので」と引き受けてくださいました。

1名減になる時の年度末は目の回るような忙しさでした。新体制の骨格作りや、主幹や主任の先生方との研修会、新採用の先生への講義や派遣交代の送り出しや受け入れ準備と3月は無休で新年度を迎えたのが懐かしい思い出です。

さて、我々派遣から管理業務の多くが手を放れました。では、我々は何に重点を置き始めたかということ、本来の派遣業務の中心である現地採用教員に対する研修の充実です。長期休業中や平日に事務所等で行う理論研修をはじめ、それまでは自分の担当校でしかできなかった模範授業を各校で、派遣それぞれの専門教科を実施していきました。初めて入るクラスでは、なかなか思うように授業を展開できないことも多いですし、もともと先生方に範を示せるほど授業が上手なわけではありません。それでも、何か一つでも子どもの身につくものを、そして先生方の参考になるものをと派遣同士で相談しながら実践してきました。派遣は全国から集まっています。同じ教材でも導入や展開の仕方にそれぞれの違いがあります。もちろん個人の考え方の違いもあってのことですが、地域性の違いを感じることも沢山あり、お互いにより刺激をシェアしていると思います。

縁あってデンバー補習授業校を訪問する機会を頂きました。模範授業をしましたが小6児童4名の教室に保護者が30数名ととても計算が合わない状況です。それだけ海外で生活している保護者にとっては子ども達の教育には関心が高い事具体例だと思います。その後の懇談会でも日本の教育事情や海外での日本語力の維持向上についてなど、私にとっても大変勉強となる時間を過ごすことができたのも併せて報告させていただきます。

5 . おわりに

この3年間の派遣で私はかけがえのない経験ができました。

まずは、これまでの学校現場での仕事とは全く違う仕事内容を体験できたことです。今、帰国し現場の一教員として仕事をしていますが、これまでにはなかった多方面からの物の見方ができるようになったと思います。

二つ目は、週1日の学校であるにも関わらず情熱を持って指導に当たってくださった先生方との出会い。その先生のお一人から「年上の私たちを上手に働かせてくれましたね」と褒めていただいたことは生涯の財産です。

そして、何よりも日本を思い、学び続けている補習校の子ども達。彼らは日本の宝です。

世界中で学び続ける彼らのことを、日本の子ども達にも紹介し、彼らに負けない子ども達の育成に携わりたいと思っています。

思いつくままに書き綴りましたが、最後までお読みいただき、ありがとうございました。